



開かれた未来へ。

筑波大学
University of Tsukuba

SGH研究班

「将来のグローバルな活躍に向けて期待される教育内容～質的データからみえてくるもの」

本日の発表内容

- ◆ アンケート・自由記述からの分析
KH Coderによる分析
質的分析：グローバル教育のためのプロセスモデル
- ◆ 面接調査からの分析
生徒の期待とその現状
帰国生間の不適應感の違い-その背景にあるもの-

筑波大学 人間系・附属高等学校 大川一郎
人間系・附属学校教育局 飯田順子





開かれた未来へ。

筑波大学

University of Tsukuba

SGH研究班

「将来のグローバルな活躍に向けて期待される教育内容～質的データからみえてくるもの」

1. アンケート・自由記述からの分析
KH Coder による分析

飯田順子



「将来、グローバルに活躍するために、どのような能力が必要だと思いますか？また、その能力を獲得するためには、どのような教育を受けたいと思いますか？」

回答例

◆ 僕はイギリスに7か月間留学しました。その中で特に思ったことは、やはり言語です。なぜなら、言語はやはり意思疎通の重大なツールであり、相手が理解できる言語で話せば相手は頭で理解してくれます。でも相手の国や話す言語で話せば、相手は心で理解してくれると思うから

<3年・男子・渡航経験有>

◆ まず、自分の物の見方を広げる教育を受けたい。ほかの国には、きっと自分の国の常識じゃ推し量れないこともあると思うので、そういう教育を受けたい

<3年・女子・渡航経験無>

自由記述における層別の頻出ワード

KH Coderによる分析

図表 7-2 女子の頻出ワード

名詞		サ変名詞		形容動詞		動詞	
能力	906	教育	397	必要	629	思う	1,290
英語	756	意見	313	大切	160	受ける	246
コミュニケーション	516	授業	287	様々	103	考える	209
自分	512	理解	217	いろいろ	65	話す	178
外国	315	交流	125	グローバル	62	伝える	173
文化	290	活躍	110	さまざま	48	持つ	167
相手	222	会話	85	重要	39	知る	164
積極	208	獲得	76	柔軟	36	学ぶ	145
機会	190	尊重	56	大事	34	話せる	139
言語	148	勉強	55	適切	17	増やす	73

※男子, 女子, 渡航経験有, 渡航経験無によって大きな違いはみられない

頻出ワードを含んだ反応例

英語

コミュニケーション力

意見のやりとりができる能力

英語でのコミュニケーション力、コミュニケーション力、意見のやりとりができる能力、他人と
て現地の人とコミュニケーションをとったり、
などで共有しやすい場を設けてもらい、そこでみんなで議論したりする教育を受けたい。

〈2年・女子(1)・渡航経験有〉

最も必要なのは、自分以外の人の意見を聞き入れ様々な視点で物事を考える
ることのできる能力、意見のやりとりができる能力、人の意見を聞くだけでなく自分で
考えた意見を発信することができる能力やその場面に応じた対応のできる
行動力が必須だと思います。そのためには英語力は欠かせないことですし、
人とのコミュニケーション力も必要だと思います。私はそのためにまず英語
力を鍛えたいと思います。もし私が海外に行ったときにあいさつ程度の英語
では言語の壁は越えることはできないと思うので英語教育の進め方の
学校でもっと海外で使える英語力を身に着けたいと思います。

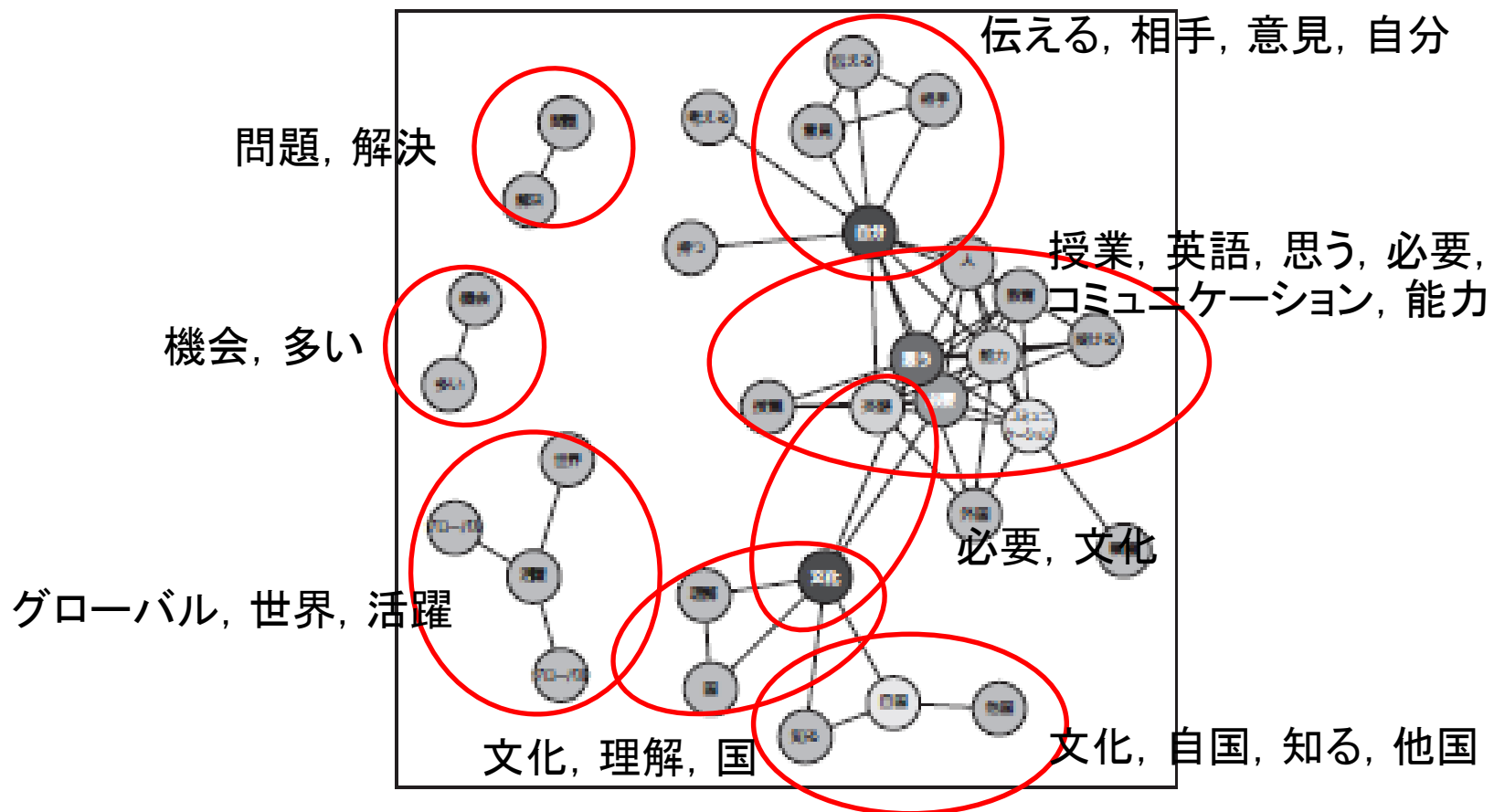
意見のやりとりができる能力

コミュニケーション力

英語

〈2年・男子(2)・渡航経験無〉

全体の共起ネットワーク図



※男子, 女子, 渡航経験有, 渡航経験無において基本的な構造は変わらない。男子には, 「実際」「行く」が出現。渡航経験無には, 「文化」が「知る」「理解」「国」というネットワークで独立する。

考察1: KH Corderからの分析

①「世界」「グローバル」「活躍」というつながり

⇒高校生段階でこういう意識が強くもたれている

②「英語」「能力」「コミュニケーション」「教育」「授業」「受ける」「必要」「思う」

⇒①を実現するために、教育、特に授業の重要性を感じて

おり、英語&コミュニケーションの能力を高めたいと思っている

③「英語」「必要」という言葉と「文化」がつながり、「文化」は「理解」「国」、「自国」「他国」「知る」とつながる

⇒そして、「英語力」「コミュニケーション力」に加えて、文化や「自国」「他国」の理解が必要という意識がもたれている。



開かれた未来へ。

筑波大学
University of Tsukuba

SGH研究班

「将来のグローバルな活躍に向けて期待される教育内容～質的データからみえてくるもの」

2. アンケート・自由記述からの分析
質的分析 グローバル教育のための
プロセスモデル

大川 一郎



自由記述例 1

- まずは、世界共通言語である英語できちんと自分の意思などを伝えたりできること。またその英語の能力が仕事に差し支えない程度にはあること。が求められていると思う。次に、グローバルというだけあってさまざまな独自の文化を持ったさまざまな国の人と関わらなければいけない。そういう人たちと関わる際にはきちんと相手の文化を認め受け入れることが大事である。違いを違いとしたまま受け入れることが大切なのである。

- もし自分の、たとえば日本の文化を否定されたら…と自分に置き換えるとわかりやすい。また、私がアメリカを訪れた際に、あちらの学生が日本の文化に興味を示してくれたことがとてもうれしかった。だれでも自分の大切にしているものを尊重されたらうれしいだろう。そういうことから相手文化に興味をもてることも大切である。

- しかし、相手の国の文化を尊重することも大切だが、**その人個人を尊重することも大切である。**国のひとくくりでそれぞれ違う人たちをひとまとめにし、「あなたは何人だから」という考えは非常にグローバルではない。何人であってもその人はその人であることを忘れてはいけないのだ。まとめると、**英語能力、相手の文化を尊重しつつも相手自身も尊重することができる能力が必要であると考えられる。**

- そのような能力を獲得するためには、**徹底的な英語教育、主に話す・聞くなどといったコミュニケーション英語を育てる教育が必要だ。**そのためには生の英語にたくさん触れることが大切である。文法だけができてコミュニケーションがとれなければ意味がない。留学やネイティブスピーカーとの交流がよい。また異文化交流をして小さいころ、物心がつき世間に対する偏見などが出来上がる前に自分と違うものがあるって当たり前であることを理解させることが必要である。学生としては留学生を受け入れたたりすることが効果的である。先にも述べたが、留学もよい。

自由記述例 2

- 将来グローバルな人材として活躍するのは、自分が育ってきた文化と自分の個性について知ることが大事だと思う。そして、それを背負い発信できる能力が必要だと思う。その能力を得るには、自分の育ってきた文化に触れ、その文化の特異性、深みを理解する機会が得られるような教育が重要だろう。

▪ また、近年は個性を出して行かなければいけない、という風潮であるが、僕個人としては、個性というのは僕は僕らしく、誰々は誰々らしくというよりは、他人と比較して見た時に自分とその人との違いであると思う。だからその違いを探し、その違いを受け入れていこうとする教育も重要だろう。

自由記述例 3

- 自分自身も含めて、日本人は間違いを恐れて、正解ばかりに固執する性質があるように感じられる。今後、世界で注目される問題(宗教、倫理など)はひとつの正解があるわけではなく、自分の意見を持ち、それを説明して相手を納得させることが重要となってくると思う。

- したがって、どのような場合にも、自分の意見を持ち、常にその反対意見なども考慮した上で、相手を納得させることが、これからの日本人に必要な能力のひとつであると思う。そのためには、受身の授業だけでなく、答えのないディスカッション形式の授業をより多く取り入れるべきだと考える。自分の考えを明瞭に説明することは、難しく感じられるが、訓練を重ねると、案外簡単に出来るものではないかと考える。

自由記述例 4

- 私はグローバルに活躍するための必要条件は、違う国で育ち異なる価値観を持つ人を、**同じ地球に住む人間として、興味や親しみをもつことだと考える**。まず興味を持っていないと異国の地で起きている問題に気づきもせず通り過ぎてしまう危険性が高く、問題について考える機会や、その問題を理解するにあたって必要な知識を得る機会が失われてしまう。ニュースなどで聞いたとしても「へえ。」の一言で済まされてしまうのではないだろうか。

- 次に親しみを持つことが必要だと考えた理由は、いくら国際問題に興味を持ちどうにか貢献したいと考えたとしても、相手のことを自分のことのように考えることができないと、貢献のつもりがただの自己満足で終わってしまうだろう。そもそも、親しみがないと国際問題解決に貢献したいとも思わないかもしれない。

自由記述例 5

- 私が必要だと思う能力は3つあります。

まず1つめは、「コミュニケーション力」です。

もし自分がみんなに伝えたい考えや提案があり、それが非常に良いものであったとしても、相手に伝えることができなければ、それはただの自分の考えたことにすぎません。

ですから、今のうちから英語を鍛えて、またさらにほかの国の言語も取り入れることによって、自分の意見や提案を積極的に伝えることができると考えます。

- 2つめに、「柔軟性」です。これは、自分の意見だけでなく、相手やそのほかの人たちの意見も取り入れることによって、より良い意見、提案、問題解決につなげることができると思います。

- 3つ目は、「**協調性**」です。

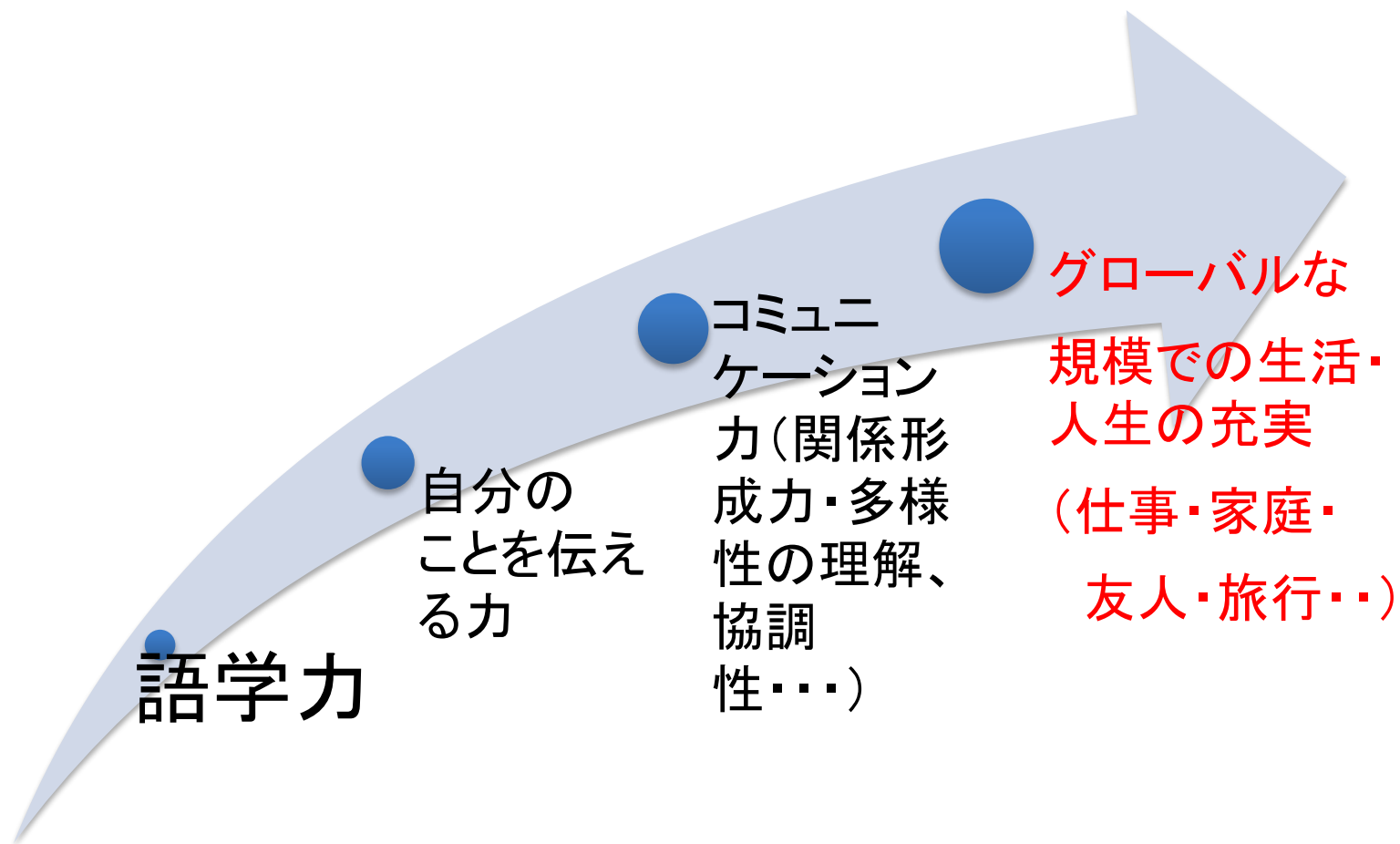
これはなかなか難しいことで、自分一人ではできないことがたくさんあることは分かっているけど、やはり自分だけで突き進んでいくことは相手との間に亀裂をいれてしまうことになると思います。

ですから、自分がリーダーになってみんなをまとめるときには、自分の意見も積極的に伝えつつ、相手との協力も大切にしていきたいと考えます。

- 私がこの3つの中で最も大切で必要だと考えるのは、**柔軟性**です。

なぜかという、コミュニケーション力は頑張つて努力すれば身に付くと思ひまし、協調性は日々の学校生活で身に付けられていくと思ひます。そのため、私は柔軟性を高めることのできる教育を受けたいと強く思ひます。

グローバル教育のためのプロセスモデル 1



グローバル教育のための プロセスモデル 2

語学力

- インプット 読む(Reading) 聴く(Listening)
- アウトプット 書く(Writing) 話す(Speaking)

伝える力 (一方向)

- 知識 自分の意見
- 自国のことを知る ・自分のことを知る
- 伝えるためのスキル
- 伝えたいという思い

コミュニケーション力 (相互理解)

- 相手のことを知る・知りたいたいという思い(興味・関心・親み)
- 協調性 ・柔軟性 ・多様性の理解
- 説得させる力

グローバルな規模での生活・ 人生の充実

- 仕事 ・家庭 ・友人 他
- → 上記領域での課題を解決する総合的な力



開かれた未来へ。

筑波大学

University of Tsukuba

SGH研究班

「将来のグローバルな活躍に向けて期待される教育内容～質的データからみえてくるもの」

3. 面接調査からの分析 生徒の期待とその現状

飯田 順子



海外渡航経験有の生徒の回答から

- 海外生活の経験(時間感覚の違い, モラル観の違い, 宗教の違い, 食事の違い, 出会いと別れの頻繁の経験, 現地の人から向けられる偏見, 日本の資源へのアクセスの困難)
- 日本人学校に通っていたため, 日本の学校への再適応に困難を感じることは少ない
- 戻ってきてからの経験(視野の広がり, グローバルな仕事への興味関心, 滞在国へのより深い興味関心, 日本人を外から客観的に見る視点)

海外渡航無の生徒の回答から

- 異文化体験の少なさ(外国人に道を聞かれたこと, 授業の課題で外国人と一緒に写真をとる課題, 学校内における帰国子女との接触体験)
- 研究者志望(数学, 化学), 海外への関心は低い。
- これまでに海外に行ったことがなく, このインタビューのすぐ後に部活動派遣で海外に行くことを予定。どのように認識が変わるのか。

海外渡航経験有の生徒の回答から

- ホームステイでの体験 (コミュニケーションの取り方の違い, ホストチェンジの体験)
- インターナショナルスクールでの体験 (多国籍, EOP (English only policy))
- オーストラリアの体験 (留学生のための教室 (アイセッド), 現地の高校生との接触体験は自分から積極的に動かないと持てない, ダンスを通じた交流)
- 戻ってきてからの変化 (はっきり言うようになった, 家族とよく話をするようになった)
- 将来の夢: 空港勤務, ファッション関係, ユネスコ

海外渡航無の生徒の回答から

- 部活動でのカンボジアからの留学生との接触体験（意識の違い，語学力の違い，外国を身近に感じる，興味関心↑，インフラの問題，視点の違い）
- クラスでのオーストラリアからの留学生（2名）との接触体験（授業中の姿勢や意識の違い，良い刺激，クラスが変わる）
- ESDユネスコ世界会議に参加⇒レセプションパーティーで喋れないもどかしさ⇒喋る機会をもちたい
- 日本の謙虚さを伝えていくと同時に，海外の積極性や力も受け入れていきたい
- 将来の夢：パイロット，高齢者に関する仕事

どのような教育を受けたいのか？

- 日本の高校での学力
 - ⇒ 将来希望する職業に就くために
- 国際的な体験 ⇒ グローバルな視野
- コミュニケーション力 (通常の授業の中で)
 - ⇒ 文化的コミュニケーション



開かれた未来へ。

筑波大学

University of Tsukuba

SGH研究班

「将来のグローバルな活躍に向けて期待される教育内容～質的データからみえてくるもの」

4. 面接調査からの分析

帰国生間の不応感の違

—その背景にあるもの—

大川 一郎



インタビュー1

小学3年～中学2年まで5年間、アメリカ滞在

- ここに来たおかげで良い影響をいっぱい受けたし、周りの人もすごい人が一杯いるし、いい人なんだけど馴れ合いだけでなく、議論したり、お互いの刺激を与えあえる。議論もするけど、挑戦するとき是一緒に仲間と挑戦する。そういう面からすると最高。ここ以外の学校は考えられない。

インタビュー2; アメリカ 幼稚園～小4、 東南アジア 中2～高1

- アメリカのみんなの性格なのかもしれないけど、アメリカではグループとかに分かれなくて、全員で盛り上がったり、昼休みとかは、毎回みんなが一緒にいる人が違ったり、クラス全員とか学年全員とかで鬼ごっこをやったり。一人でいることがない。一人の子はほとんど見たことない。もし一人の子が泣いていたら、みんな遊ぼうぜって誘って。

- 日本ではいじめがあるけど、私のいったアメリカの学校は全然ない。逆にグループに分かれる習性のある日本では、全員が一体化していて。日本に帰って来て、私は、今の学校は国際的なので、すごくグループに分かれているって思ったことはないですけど。でもアメリカよりはグループに分かれるようになっていて、昼休みは見ている、この人はこの人と、っていう分け方になっていて。そこがすごいびっくりした。

- アメリカで英語を学んだのでアメリカンイングリッシュ。シンガポールはシングリッシュっていう特殊な英語があって、それがすごく難しい。文法気にせずしゃべってるんですけど、それが文法をすごく気にさせるようなしゃべり方で。ツーとか、そういう小さい単語を抜かすので、一瞬「なに言ってるんだろ？」ってなるんですけど、すぐ「あーっ」って。省略しすぎちゃう。だから、大事な単語がたまに抜けていたりするので、そこはびっくりしちゃう。シンガポールはジャパニッシュの方が通じる。マックとか行ってアメリカンイングリッシュでしゃべると、「え？」って言われる。でも、日本語英語でしゃべってみると通じるんです。ジャパニッシュは日本語と英語どっちもしゃべれる友達じゃないと、通じない。日本語風にいつてみたり、いろいろ工夫が必要だった。

インタビュー3： 小1～小3 西アフリカ 小6～中3 東ヨーロッパ

B: 海外から日本に戻ってきてびっくりしたことは、日本人がマスクをしてること。どうしてみんなマスクをしているのか疑問だった。

B: 花粉症の人が多いなだと思った。あとは、日本人は、衛生面に敏感なんだと思った。

B: 日本の満員電車で驚いた。乗れない人数がいるのがびっくりした。いまだに乗るのには抵抗があるが頑張らなくてはならないと思う。

B: 日本人が人との接触を好まないことに驚いた。友達とハグするのが普通だと思っていたが、日本人はあまりそういうことを好まないということを知り、驚いた。

I: 帰ってきてからも最初はやっていましたか？

B: みんながやっていないのを知ってからはやっていない。

B: インターナショナルスクールとの違いなんだろうけど、日本にいる人の考え方が幼いと思った。日本でみんなで騒ぐような内容を、インターでは小中学生で楽しんでいた。高校生や中学3年生のときに友達と話していたことは、今から考えると大人な話をしていただんだと感 じる。

帰国生の不適応感の背景にあるもの

- ・ 帰国生は、異文化体験の中でのクリティカル
インシデントに対して2度、適応を迫られる。
 - ・ 語学力の格差がもたらす不適応感
 - 対教師関係
 - 対生徒関係
- 在学する学校の違い(環境)が、
適応の違いをもたらす

グローバルな規模

